

めだか大学通信 7号

笠木透・連続作詞講座了コンサートを終えて

1012・8 岡田京子

笠木さんを迎えて、無我夢中で終えた6月30日からあつという間に一ヶ月がたちました。

でもその間、会えばお互いその話を繰り返し、それぞれのグループでもそれが何だったかを語り合いました。良い一ヶ月だったと思います。

そしてアンケートを書いてくださった皆さまの暖かいひと言、初体験を共にした私たちの感想がやっと整理出来て、それに、笠木透さんと安達元彦さんから、このようなメッセージを頂きましたので、みなさんに送ります。次に進むための力強いアドバイスです。これをしっかり読んで、又話し合っていきましょう。

「寺子屋（めだか大学）の君へ」

笠木 透

自分のことを詩にするなんて、考えたこともなかった。そんなものに意味があり、価値があるとは思ってもみなかった。

そんな君が、詩を書くハメになったのだから、とても困難で、いくら考えても、なにもうかんではこなかった。

それでもみんなが書き始めるとシブシブ書いてみた。故郷の小学校の頃、田舎の家のいろり端、友を裏切ったこと、家族との別れ、などなど。こんな狭い、自分だけのことを、書いてもいいのか。みんなに伝わるのか、などと、疑ったり、ひるんだり。それでも1年ほどかけて詩をかいた。

やっと形になって、ホッとしたら、今度はその詩に曲をつけろと言われた。それも、民謡音階(五音階)でという、きびしい条件つきだった。

これまで、七音階だったのだし、五音階など考えたこともない。これまた、やったことのないことだったから、とても無理でした。一度ならず挑戦したものの、ほとんどの人は挫折。リフレインの一行目ぐらいは、ハナウタでうたっていたのだが、後が出てこない。もう知らん。ほっておいたら、岡田京子さんから電話があって、そのワンフレーズをうたってみたら、「良いじゃないの」と言われ、一緒に曲を作ることになったりもした。

なにもかも、みんな初めてのことだった。自分のことを、言葉にし、音にしたのですが、どうしたらいいのか、ワケが分からず、困惑したのです。

困難は当然のことでした。私たち民衆、普通の人びとは、表現することから、遠ざけられ、切り捨てられてきたのです。歌は、才能がある人が作り、才能がある人がうたい、おまえたちは、それをありがたく聴けばいい。そう決まっていたのです。

自分たちの、日々の暮らしや、その思いをうたい、生きていく力になるような歌は、自分たちで作るのだし、作る力もあるのに、私たちは作らなかつた。私たちはこの国を支配する人たちの、ある意図によ

って、眠らされてきたといってもいいでしょう。

いったん眠ったものを、目覚めさせるのは、とても大変で、時間がかかります。作っている曲が、いいのか、悪いのか、考えるヒマも、判断する力もありません。無我夢中、最後はヤケクソ状態になり、自分の中にあつた音をはき出すようにして、ようやく形にしたのです。なんの因果で、こんなことをせんならんのか。

そして、さらに、なんと自分が裸になったような歌を、みんなの前で歌うことになったのです。下手に決まっています。みんなに聞いてもらえるような歌ではありません。恥ずかしさと、とまどいをない交ぜにしたような思いで、あの日を迎えました。

現代座の地下ホール、満員のお客さんです。オロオロしながら、せいっぱいうたいました。初めて聞く歌なのに、みんな泣いています。「そう、その通り。あなたの歌だけど、私の歌なのよ」。共感が広がっていきました。みんなで感動を分かちあい、胸がいっぱいになったのです。人間として、あふれる幸せにつつまれた瞬間でした。

そこには、小さいけれど、大きな、見えないけれど、確かな、お金では手にいれることができない、人生の宝物がありました。

人間は、自分を表現して、人間になっていくのでしょうか。自分のことは、自分でうたう。自分の歌をつくることは、自分を見つけ、自分をつくることでもあるのです。

自分をうたい、少し解放され、自らの手で、小さな自由を獲得した君に、心からの祝福と、大きな拍手を贈ります。

君と一緒に、悪戦苦闘した日々を、どんなに大切に思っていることか。おもしろかったよなア。有り難う。
(2012・07・24)

一緒に考えたいこと

安達元彦

6. 30コンサートの全体印象をいうと、最後の稽古で熊倉さんが言ったことにつきます。すべての歌がことごとく本音の濃縮ジュース。とりつころうことない、素朴で赤裸々な心根の吐露は、聴く人にヒトゴトでない切なる心呼び覚ましワガコトとしてのひしとした共感を誘ったと思います。満腔のオメデトウを!!

みなさん苦勞されたことでしょうか。だが、それはどういう苦勞だったのか? なぜ苦勞しなければならなかったのか?

例によってコトバになぞらえて音楽のことをちょっと考えてみたい。

母語とは、すすんで勉強した覚えもないのに気がついたらいつの間にかしゃべっちゃっているコトバです。母語の特徴はマチガウことができないこと。「つまんないこといっちゃってごめんなさい」というのを「ない・つまん・こと・ちゃって・いっ・さい・ごめんな」とは言えない。慌てるほどマチガウことができない。

現存する民謡の音の構造はじつに多様で豊かです。けっして「民謡音階」オンリーではない。複数の音階の混在(モード・チェンジ)、臨時の変化音、臨時の転調(キー・チェンジ)などなど。わらべ唄(子どもの出まかせ歌)でさえ、民謡に負けない複雑さと洗練度をそなえています。こんなに自由気ままでい

ながら、基本的システム（法則）から少しもはずれることがない。そして、民謡にしろ、わらべ唄にしろ、誰がいつうたいだしたかわからないけれど、そして伝播伝承の中で変化していったのでしょうか、その際、歌い手（作り手）たちが、音の運動法則からはずれないために呻吟したとはちょっと想像しにくいのですがネ。

今、わたしたちが、なんの考えもなく好き勝手にうたったら？ 日本語とアメリカ語の乱脈ブレンドになりそうな気がする——「つまん・thing・ない・ちゃ・speak・って・sorry・ネ」。クレオールまたはピジンミュージック（混血音楽）も、あっていい気もする。いや、実際にあります。それをどう考える？ 純日本語・純アメリカ語から見たらデタラメでも、一定の共通言語として機能していれば、他からとやかに言われるスジアイはない。ただ、実際の言語世界ではクレオールやピジンは社会的人種差別の要因として現在も厳しい現実にあります。この際の要は、それが個人の恣意的趣味嗜好ではなく構造に整合的な法則性があり、地域や階層全員にしっかり共有されていること。そして、差別者（純日本語族・純アメリカ語族）に対して「あんたらがなんと言おうとこれが俺たちのコトバだよ。文句あつか！」とハラをくくれるかどうか。

なんかややこしいこと言いました。でもこれ、みなさんと共通の宿題にしたいと思っていますのぞ。

(2012. 7/20)

来場されたみなさんのアンケート

自分の思っていることを表現する時、何のために表わすのか、聴いて欲しいのか、何の為に伝えたいのか、何の為に歌うのか、歌うことで何を得たいか、深く考える時間になりました。宿題を持って帰ります。ありがとうございました。“まるで子どものように一生懸命やる”という岡田京子さんの言葉が印象的でした。

(有光リサ)

トップバッターの歌がいちばん印象に残りました。みなさんそれぞれ素敵なのに一番目はやっぱり得ですね。一曲、一曲を全員で創り上げたという感じに心打たれました。又岡田さんのオーラも含めてこれが日本人の歌なのですね！

(麻生 禎子)

一曲一曲が心にしみました。ありがとうございました。

(青木 紀子)

すぐにいろんなことを言葉にできないのですが、「普通」の人が、自分で詩を書いて曲をつけて、（自分で（十人と一緒に）歌うという行為。豊かだなあと思いました。

私はピアノを弾く人間なのですが、これまでもそうでしたが、今日も「自分はどうやって音楽を続けて行くんだろう・・・続けて行けばよいのだろう」と考え込んでしまいました。ちょうど今日、ここに来る直前にもそういうことを考えざるを得ない出来事がありますます悩み中です。

笠木さんのことは今まで人づてにお話を聞いたり、録音を聞いたり、本を読んだり、歌を歌ったりして知っていたけれど「ナマ」を見聞きするのは初めてでした。今までのものが「ナマ 笠木さん」に繋がりました。来てよかったです。

(秋山 ちづる)

歌は暮らしの中から、その人の人生、生き様の中から生まれてくるんですね。一生懸命生きていないと歌は生まれてこないということがよく分かりました。素敵な方々との出会いをありがとうございました。

(亀田 幸子)

無条件に笑えて泣けました。日常的に脳を通さず生きているところが多々ある私ですが、本当にほんとうに感動しました。特に母、子を歌った歌は、体全部ぶるぶるしてしかたありません。家に帰って家族に話して聞かせたい今日の時間でした。

(木村 康恵)

長い時間でしたが、頭も心も疲れませんでした。(おしりはいたくなりましたが・・・)むしろ心地よくて、すっきりした感じです。笠木さんの歌とお話、初めて聞いたのですが、とても楽しかったです。

(栗田 芽生)

どの歌もどの歌も、どうしてこんなに心の中に届いてくるのだろうかとつくづく思いました。自分のことのように歌の中に入って来ました。5音階の根源性と共に、その人その人の人生を歌っていることがその人の真実を歌っていることが、心の中にこれだけ鋭く入って来る力なのではないかと思いました。その人の歌をその人とともに歌うことのすばらしさを感じました。それとともに、生きるエネルギーになる民衆の歌のお話も大切なことと思いました。

(桑原 正美)

今後、震災支援が付いてまわりますから、現金の扱い&現金の価値を思います。プロフェッショナルの人々のメンバーとして後から付いて行きたいです。(手伝い人)

(小宮山 あい子)

一部・・・みなさんの歌詞、歌声がグーンと心の奥に響きました。何度も涙でした。

二部・・・笠木さんの話を聞きながらあの見ごたえのある顔を見ていると・・・S・40年代の夕方、八百屋さんで一段落したおじさんがバンコに腰かけて説教していて、周りには仕事を終えた人達が集まって来て、ワハハの笑い声と歌声が浮かんできました。その中には、炭坑の仕事を終えヘルメットも顔も石炭の炭で黒くした父もいるでしょう。ありがとうございました。増田さん、ギターと歌声すてき！民謡音階、私も自分にしっとり合うのはこの音階のよう、ふと孫に、ロズさんで歌っているようです。

(島田房美)

主人との人生を詩に書きたくなりました！

おおきな手ぎゅっと

握りしめるのはボートのオール

私の手も握り締めて欲しいのに...

これ、何とか詩にして曲にしたいのですが...うーん

(白井 由美子)

心洗われる詩・曲。涙、涙、涙でいっぱい幸せな時間を過ごしました。

(鈴木 英美)

みなさまお疲れ様でした。この日を迎えるまでにどれだけの準備、練習、打ち合わせがあったことか、よくわかります。そして、それを可能にしこのコンサートを作り上げたのはみなさまの想い、想い、想いだったのだと思います。熱く、優しく、丁寧な個々の想い、連体する想い、こんな心に響く手づくりのコンサートははじめてだったような気がします。何年ぶりだったのでしょうか。ポロポロと涙が溢れ出しました。ありがとうございました。

(末広 正子)

とても満たされた4時間でした。「表現」がいかにか人に繋ぎ、人を満たしてくれるか初めてめて深く深く感じました。皆さんの歌どれもかけがえのなさがいっぱいでした。ありがとうございました。笠木さんのお話もうしぶりでお聞きしましたが、やはり説得力がありとても興味深かったです。ハワイ移民の話すっかり忘れていました。

(鈴木 たか子)

ありがとうございました。私たちも3年間、詩をつくること、曲をつくることの産みの苦しみそして喜びを味わってきました。思えば5年前私たちは岡田京子さんから音の種の存在を教えて頂きましたので、もう少し簡単にいくものと・・・しかしなかなか大変でした。その中でも岡田さんから“ひとりでやってはダメなのよ、皆でやるのよ”と教えて頂いたことがずっと心に残っていたので、皆で一緒にうたづくりとり組むことができたと思います。他人事でなく共感でき、涙が出ました。ありがとうございました。

(田村 陽子)

今日の笠木さんのお話のとおり、表現することって人間にしかできない素晴らしいことだと実感しました。詞を書く時の生みの苦しみ(?) その後に共感してもらえた時の温かい感情。私も体験したので今日のコンサートは心にしみました。

「君にありがとう」では号泣してしまいました。(私も2児の母です)

(竹内 高子)

全体に素晴らしい会でした。それぞれが本当に大切な宝ものを抱いて歌っていました。何度もこみあげてくるものがありました。ソロはもちろんですが、それに和してくる時のみんなの声がすごく良かったです。ソロに添わせるというのでもなく、それぞれというのでもなく、もっと深いところで繋がっている安心からくる場の声でした。私が夢見る場です。プロセスが見えてきました。プロセスそのものがハムケだったんだなあと・・・ こういう場を創造できる岡田さんに脱帽します。やっぱり岡田さんですね。「しつこく」と中村京子さんが言ってましたが、それは人間への深い信頼から来ると思いました。ありがとうございました。もう一度私も襟を正して人と関わっていこうと思います。

(たつの 素子)

全く知らない人の個人的な歌なのに、どうしてこんなにも自分のことのように、絵が見てしまう程感じるのだろう。きっと借りものでないご本人の歌だからだということが笠木さんのお話から分かりました。いつか、私も、とは思いますが、いつのことになるやら・・・ありがとうございました。お茶もクッキーもとても美味しかったです。ごちそうさまでした。

(津布工 リリ子)

心温まるすてきなコンサートでした。

作ったみなさんの気持ちが伝わってきて、何度も心にせまるものがありました。

打ち上げに参加するって言ったのですが、みなさんの歌を聴いて、ここまできた時の重さを目の当たりにして、たじろいでしまいました。ごめんなさい。

フィールド・フォークに初めて参加したとき、感じたものを今日、改めて感じました。

「フィールド・フォーク・フロム・中津川 vol.2」のブックレットに私の拙い文も載せてもらっていたのですが、思わず、今日帰って読み返してしまいました。

フィールド・フォークと柳宗悦の民芸運動について書きましたが、今も思いは同じです。そして、持続するということ……。岡田さんやクッキングハウスのスゴさだどつくづく思います。きっと、次の一步を踏み出されていらっしゃるんでしょうね。

また、お会いするのを楽しみにしています。マイクを通さないナマの声のコンサートはいいですね。

(津島 さゆり)

昨日は久しぶりに皆さんに会えて本当に嬉しかったです。安達さんのピアノが聴けて幸せ！コンサート、素晴らしかった！舞台の上の一人一人の顔が輝いていました。自分の歌をうたうのってこんなにも素敵なことなんですね。聴いていて胸が熱くなりました。その人の人生を少しだけだけれど共有できたように思え、その人に近づけたように思えました。

それにしても普通の人がこんなに心に響く歌を創るなんて・・・！やっぱり音の種も、詩の種も皆持っていて、でもそれをなかなか自分では見つけられないでいる。自分が正直な一歩を踏み出して、それをみんなできやりとりする中で気づいていくということなのでしょう。

久しぶりにワクワクしながら、でも心穏やかで心やすまる時間を過ごすことができました。岡田さんの頭もまだまだはっきりしているようだし、また、ゆっくりと皆さんのところに戻れたらと思っています。

(名取 真理子)

心ふるわせた時間を参加者や出演者の皆様と共有できたことに感謝！！誰でも音の種を持っているのだと感じます。笠木さんのコンサートも本当によかったです。歌で人々を感じさせ動かすこと、元気がでる事を実感しています。皆さま（出演者）の笑顔がとても素敵でした。

私の住む笠間市も大震災での被害が甚大で我が家も被害にあいましたが元気がでました。

ありがとうございました。

(根本 美也子)

笠木さんのお話がよかった。皆さんの詩の内容で、自分の気持ち（過去の）を思い出され励まされました。原発の社員だったのでいろいろ大変だった事や辛いことが思い出されました。ありがとうございました。

(根本 仁)

皆さまの作られた歌は笠木さんがおっしゃった様に本当に自分の歌のようでした。本当の自分の歌はきっと周りの人たちにも伝わる歌なんだと思いました。

後半の笠木さんのコンサート、声しか聞いたことのなかった笠木さんを“生”で見られて感激しました。また機会があれば拝見したいです。

(平瀬 州時)

詩も書いてみたい、曲を作りたい、歌いたい、表現したいと強く思いました。渡辺さんのバックで「いろりの赤い火」を歌いましたが、客席のみなさんがしみじみと聴きいっているのを感じて胸が熱くなりました。あらためていい歌だなあ・・・と思ひ直しました。

(増田 康子)

今日は皆さんの心の内を、そっとみせて下さるステキな会に参加させて頂きありがとうございました。

自分でも歌をつくることをクッキングハウスでするようになり、どんなにその一行に悩んだか共感でき、みなさんのおもいにふれて感動しました。お母さんや故郷を歌った歌は涙なしには聞けませんでした。

(林 由佳里)

作詞は各人の個性がでていた。しかし作曲は、皆にかよっていて印象がぼやけた。

村上さんの歌、李和蓮さんのは個性的でよかった。でも皆さん楽しそうだったので良いと思う。

(山本 愛子)

岡田京子さんが、一人一人それぞれがもっている可能性、音の種を丁寧に引き出していることがよく伝わって来ました。一人一人の人生を大切にしていることがわかるので、気持ちよく安心して聴いていることができました。歌に安達元彦さんのピアノがなんと宝石がこぼれるように美しく輝くように寄り添って

いてくれたことでしょう。

今日発表されたみなさんは最高に幸せだったと思います。思い出を表現しようとするプロセスの中で心の中のひっかかっていたものを、いつの間にか越えているのだと思いました。クッキングハウスのみんなと参加しました。私たちも25周年の歌をみんなで作って発表します。

笠木さんの『ペンペン草』の歌は、心にすっと飛び込んできて、涙が出ました。ペンペン草をいとおしいと思いました。
(松浦 幸子)

今日はコンサートにお呼びいただきありがとうございました。みなさんの発表曲は全て自分自身身の廻りの事、家族の事をメインした本当のフォークソングでした。私にとって大変参考になりました。

現代座の前で雑花塾の増田さん・安達さんとお会いして少しお話をしてから開場に入りましたが、可なり顔見知りの方がおられました。

発表会の前に笠木さんの「海に向って」をみんなで練習しましょうと言うので、この曲は知っているのに軽い気持ちでいたところ歌詞は同じでも曲が全く違い譜面を見ながらひと苦勞でした。今回来られているお客さんは音楽に関係している方がほとんどでしっかりした音程で歌われていました。(私は?????)

終了コンサートは16曲の新曲が有りまして、作詞作曲は初めての方が大半だそうですが、作詞は心にしみる内容で家族の事、今は亡き両親の事・友達の事・身の周りの事等で聞いていると涙が出そうな曲ばかりでした。笠木さん・岡田さんと共に勉強して作り上げた思い出の歌になるでしょう。

私も詞を作るのに非常に勉強になりました。(私は曲は借曲ですが)最後にゲストのクッキングハウスの歌を聞きましたが、これが又素晴らしく勇気をもらえる歌で早速覚えたいと思っています。

(水谷 正行)

今日は本当に有難うございました。皆さんとても上手にきれいな歌声で感動しました。

私は家族とあまり上手いかず喧嘩ばかりしていますが、母も苦勞して私を育ててくれたのかと思出し、考えさせられる曲も沢山ありました。『大根一本』という曲もとても素晴らしいと思いました。私も今自分に何ができるか考えて生きていきたいと思っています。

(安高 真季子)

こころいっぱいコンサートでした。うたは「心のことば」のようでした。その人の心そのまま見えて来て、ご一緒に泣いたり、歌ったりでした。それぞれが言いたいことが伝えたいことが、これほど鮮明に情景が見えてしみじみと優しく伝えられるのも又歌なのだと思いました。

岡田さんの40年の歩みを今日のコンサートでしっかり感じさせていただきました。岡田さん、難産でしたが健やかで美しい子どもが沢山産まれましたね。おめでとうございます。

(李 和蓮)

本日は素晴らしい歌を聴かせて下さってありがとうございました。自分たちで創る音楽は親しみやすく歌いやすいと思いました。今後も歌を作り続けてください。そして又聞かせて下さい。(匿名)

故郷を思う心や家族を大切に思う心が、素朴な詩に表現され温かい気持ちになれました。メロディも民謡音階で日本人の心の故郷、又わらべ歌のようなやさしさを持った曲になり、懐かしい作品になっていました。アレンジもとても素敵でしたね。楽譜と歌詞は見開きで、出来るなら歌詞は縦書きで作って頂けたら良かったのに！
(匿名)

おひとりおひとりの、心にしみこむ歌に涙したり、思わず笑ってしまったりでした。

自分のこれからの生き方も先に光が見えた気持ちになって元気が出ました。こんなにあたたかなコンサートに来て本当に良かったです。皆さんますます頑張っ活動をして下さい。

次回も楽しみにしております。ありがとうございました。

(匿名)

みなさんの歌を聞いて本当によかったです。

(匿名)

生まれて初めての事でした。夢のような4時間でした。又機会があったら来てみたいです。

ありがとうございました。

(匿名)

全てに感動しました。笠木さんの言うようにプロでないからこそ良い所も沢山発見出来ました。

ありがとうございました。気分が楽になりました。

(匿名)

何より短い詞の中に、それぞれの想いをこめて作られた詩であることがよく伝わり静かな感動をいただきました。誰にでもある想いを人に伝わる詩で届けてくださり、この席に来て良かったと思います。

人生折り返し地点の私としても何か自分ができる事を始めなかったら・・・という思いが又こみあげてきています。ほんの少し先輩方の活躍に心より拍手を送らせていただきます。ありがとうございました。若い時代、次世代の人達のためにもがんばりましょう！！

(匿名)

素晴らしいコンサートでした。歌をつくる・・・私の中にはないものです。岡田さんもっともって続けてください。きっと何かが始まり、変わる・・・気がします。

(匿名)

出演者{作者}のひと言

小池 久美子

当日までみなさんと心ひとつにして創り上げたコンサート。ドキドキしながらも楽しく歌えて嬉しく思いました。また、素敵なお仲間と出会え、岡田先生が産婆をしてくださった歌。その一つ一つが自分の歌として大切なものとなり、胸がいっぱいになりました。会場のみなさんも笑ったり、涙したりと、その姿に沢山の感動を頂きました。

これからも歌う場があり、又自分達でもその場所を求めて行けるなら、小さな場所でもこの全部の歌を大切に歌って行けたら最高に幸せです。

小関 玲子

詩なら書けるかもと気軽に参加してみた笠木さんの詞の講座でした。でも、詞は私がイメージしていたものよりずっと難しかった。続いて参加したつくり小屋も、曲を作る作業は私にはとても難しいものでした。でも、折角だから作った詞に曲をつけようと思ひ必死で考えました。そして岡田先生に助けていただ

いてなんとか歌になりました。

自分の歌をみんなの中で歌う時、いつも汗がドーンと出ます。恥ずかしさと、申し訳なさでいっぱいになりました。でも、他の方たちの歌を聴くと涙が出そうになったり、ふとした瞬間に口ずさんでいたりして、良い歌だなあ・・・と感じてきました。また、他の方々の歌が出来ていく過程に参加する事はとても楽しい時間でした。それにしても歌が下りてきたり、湧き上がってくるというのは凄いことです。私はまだそういう経験がありません。憧れの世界です。

そして修了コンサートは、私にひとつ小さくて大きな変化を与えてくれました。このコンサートに向けて歌っていくうちに変な汗をかかなくなりました。(笑)

それから一緒にやっていく皆さんと、とても近くなった気がします。私にとって安心できる場になっていました。

詞も曲も、本当の自分に向き合わないといけません。それはある意味とても苦しい作業でした。その作業をしながら一つのコンサートに向かってきたからこそ、安心して自分を出し、本音で話しても良い場になったのかな・・・と思います。会場に向かう途中、皆さんの歌がどんどん頭の中に出てきて、そして涙が出ました。今日来てくれる方々にみんなの歌を聞かせたい、と心から思いました。当日の何とも言えない温かな雰囲気は初めてのものでした。本当に参加して良かったと思いました。

五音階で作る歌は、聴いた人に共感や感動を与えてくれるのだということも実感できました。まだ自分の中では自分のものになっていない部分もあり、皆さんのような歌に近づけたらとも思うので、また続けていきたいと思います。

小須田 淳

「作詞・作曲・歌う」という私の人生の中で考えたことのない経験をしました。

しかも使う音は日本の民謡音階という五音階です。当日の作品は16名のいろんな人生を経たいろんな個性の人達が、それぞれのグループで闊達に意見を交わしてやって来ました。

連続講座で笠木さんに言われたことは ①字余りをなくすこと ②リフレインを入れなさい・・・でした。詩をつくる友人はいるのですが、自分で詩をつくらるとなると大変です。三宅さんはじめ「つくり小屋」の皆さんのご援助で素敵な詩ができました。曲は岡田さんのご援助で補講も受けました。何とすばらしい心ワクワクするメロディでしょう。特にラストの「なつかしいおもいで・・・」は何とも言えない音でした。去年12月に曲ができて毎朝5回練習しましたが、息づきがなかなか上手いかずコンサート当日まで心配でした。皆さんと手を繋いで童心に返っておおいに癒されました。安達さんのピアノ、岡田さんのアコーディオン伴奏で心躍りました。

チケットの販売や歌集の作製諸々の実務など細田さん、斎藤さん、中村さん、三宅さん、小池さんスタッフの皆さん大変だったでしょう。御苦労さまでした。

私の親友の石井彰さんの感想は・・・「音を知らない君への子守唄」「母さんごめんなさい」は特に感動し涙が出ました。私の詩作の上でもおおいに勉強になりました。・・・ということでした。(石井さんは出版社の社長で作詞を600位しています) みんなで協力し合い励ましあってすばらしい音と雰囲気のコンサートになって嬉しく思っています

斉藤 としえ

今まで感じたことのないような、心を揺さぶられたとても素敵なコンサートでした。

大切な思いでの一つになりました。

一番最初に、みんなで手を繋いで「小海小学校」を笑顔で歌ったので、変な緊張感がどこかへ飛んで行ってしまいました。会場に来ている人達の顔もはっきりと見えまして、一人じゃない、みんなと一緒にだということは、なんと心強かったことでしょう。

みんなの歌も自分の歌のように思え、そのように歌っていました。今でも気が付けばだれかのリフレインのところを口ずさんでいます。

「大根1本」の歌は、みんなでわらべ歌のように歌ったのですが、自分で作った歌ながらほんとに難しかったです。岡田さんから何度も駄目だしがありましたが、一緒に練習してくれたみなさんありがとうね！みんなと一緒に歌えてうれしかったです。

わらべ歌って歌いやすいはずなのに・・・どうしてこの歌は難しかったのかなあ…。

初めの頃、なにげなく鼻歌のように創った子守唄が五音階だったのでびっくりしたのですが、五音階しか使えない曲づくりを通して、自分ではまったく意識していなかった自分の根っこに辿りつけたような気がしています。岡田さんの物凄いパワーに圧倒されながら、これからも歌創りを楽しんでいきたいと思います。

中村 由紀男

こんなに素晴らしいユニークなコンサートは、素人では数多いコンサートに関してきた僕にとっても初めての経験です。発表曲はどれもがその人にしか創れない、同じような人生を送ってきた多くの人に共感をよぶ作品だと思います。そして自分で歌って発表したというのも良かったんでしょう。

笠木さんのお話も、「表現することは生きることの証」「素人が音楽することこそ、意味がある」（実際に言われた言葉は違っていたでしょうが、こういう意味だと僕は捉えました。）など、示唆に富んだものがたくさんありました。

小泉文夫氏の日本音楽理論を現代に受け継ぎ、それを実践しながら未来に発展させようとする岡田京子さんの強い意志に沿い、僕もスタート台から飛び立った気分です。

僕も、ずっと歌ってきたし、それは死ぬまで続けていきたい。歌は喜怒哀楽の表現である、言い換えれば、生きることの意味を表現し共有するものだと思うからです。（カッコ良く言うところなりますが、本当は単に“好きだから”なのかも。）そして、それぞれの自分の感情をもっと深く表現しようとするれば、自分で創るしかない。

笠木さんや岡田さんたちの呼びかけに答えて詩や曲を創る人が増え、広がり、つながっていくことが、自己実現と豊かな社会への大きな力にもなると思うのです。たくさんの人が歌を創ろうとすることは、それほど大切なことだと思うのです。

中村 京子

私が今まで経験したコンサートの中で、最高に素晴らしいお客さん（聴き手）でした。会場がとっても温かく優しさに包まれていて、聴き手と演奏者が一体になっている雰囲気を感じ、心が震えてきました。一つ一つの演奏にお客さんが丁寧に答えてくれる、そして、発表する側もそれを受け止めて自分らしい表現を一人一人がしていたので、舞台の上で緊張しながらも、とっても居心地のよい空間に身を委ねることができました。

コンサートを準備する過程で、みんなの曲が「いい曲、好きな曲」から「大切な曲」になり、自分の曲

と同じように私にとってかけがえのない曲になりました。

このコンサートは私に宝物をくれました。そして、この宝物を忘れることなく、自分の歩いてきた道をたどりながら、音探しをしていこうと思います。

音の根っこを見つけることは、自分ときちんと向き合うことなしにはできない作業だと思います。自分の暮らし方と結びつけながら、一步一步やって行きます。

船岡 嘉彦

五音階で歌を作るのはもちろん初めてでしたが、大変ではあったが楽しくそして沢山の発見がありました。

笠木講座は後半の1回しか参加できず、その時の自分の母に対する想いを書きましたが、とても歌になるとは思いませんでした。しかし、すみれの仲間と岡田京子さんの厳しくやさしい励ましの中で、次第に詩も曲も出来て行くのは新鮮な驚きを感じました。曲が出来て歌いますと本当に自分の気持ちや想いがにじみ出て涙が出てしまいます。この出来事を今後に生かしていきたいと思います。皆さんありがとうございました。

細田 伸昭

6月30日はもっと先だと思っていたのに、あっという間にこの日を迎えたと言う感じでした。正直なところ、どれだけ私たちの歌が受け入れられるのか不安なところがあったのですが、出演者の歌の内容に、客席が共感していたということを感じとれたコンサートでした。

笠木さんが言われたように、これだけ素人の歌を続けて歌うような形のコンサートはほとんど無かったと、私も思います。こうした貴重な体験の機会を作ってくれた岡田さんやスタッフ、出演者のみんな、それに笠木さんに感謝です。

楽しいコンサートにできたと思います。コンサートを終えた後、みんなの作った歌のフレーズが、時折自然に出てきます。くり返して練習したせいもあるでしょうが、一人でじっくり歌うとどの歌も本当に味わいのあるいい歌だなと思うこの頃です。

村上 稔子

「みんなちがって みんないい」とは良く聞く言葉です。そのことを一応分かっているつもりでいました。でも今回、作曲を通して頭ではなく心で理解できたように思いました。・・・と言うのは自分の歌より他の人達の歌をうたいたくて、うたいたくてウズウズしたり、知らないうちに口ずさんでいたりしていたからです。

初めての作曲だったけど、みんなと一緒にでなかったらこんなに楽しい思い出にはならなかったと思います。不思議な経験でした。

またどの曲もすぐに場面をイメージでき、言葉と音が自然に体に入って来ました。民謡音階だったからなのでしょうけど・・・やっぱり不思議です。これが「生命記憶」というもののでしょうか？

渡辺 ミヨ子

一般人の私達で、素人の人の歌を見に来て下さった全ての人に、心に響く歌声を届けられたと思っています。プロではないので決して上手ではないのですが、一人一人のお話、歌、素直に心に入りました。そして、一番驚いるのは自分達でした。

作詞が出来たこと、作曲して歌が出来たこと、それを自分で歌っている事、ほとんどの人が自分で自分の事が信じられない事のように思っているのです。

司会進行もスムーズで流れるように進行していきました。会場は静かな感動がズート渦巻いているかのようでした。時には涙ぐみながら、みなさん耳を傾けていました。

私は合同練習は2回行きました。歌詞を全部覚えていない私は、一週間毎日お昼を食べる前声を出して練習しました。みんな本番が一番良かったです。そして岡田先生の長いお話は分かりやすく熱意が伝わってくるものがありました。プロには出来ない圧巻でした。そして忙しい中参加して良かったなあ・・・と思います。みんなみんなそれぞれ忙しいのに、会場ひとつに集まり、そして楽しむ、何て素敵なことしているのだろうと、後で振り返ってうれしくなりました。

今井 治江

お金を出してチケットを買ったお客さんの前で、自分が作った歌を自分が歌って聞いてもらう、まさに生まれて初めての体験でした。「今時、こんな良いお客さんたちはいないよね」「本当ですねえ」と語り合ったほどです。昨日まで知らなかった人たちが、日本語の音である五音階の歌を聴いて、こんな近くにいると、自分をさらけ出してもちっとも怖くない、そのことを一番嬉しく感じました。

又、安達さんの言われた、「朝鮮民族の言葉を奪ったそのツケで、私たち日本人は自分たちの音の言葉をいとも簡単に棄ててしまった」と言われたことが本当によく分かりました。

私のように、感情と言葉をうまく結びつけられない者にも、本当にうなづけることで、又、次の歌に挑戦する勇気をもらいました。

大畑 孝子

笠木さんの詞の講座に三回でたことがきっかけとなって、生まれて初めて「歌」を作りました。もちろん岡田さんという助産士さんがいてくれたからこそですが、書きたいことがあっても、それを限られた字数の中に入れることは大変で、改めて笠木さんたち作詞されている方たちはすごいなあと思いました。

私の歌は、子育てと仕事という、どちらも大切に棄てられない大きな課題の間で悩み、葛藤していた頃の気持ちを書いたもので、一番も二番も三番も実際にあったことです。

発表の日はリフレインのところを、三人の母親仲間たちが一緒に歌ってくれました。「歌いたかったの！」「この部分わかるよね」と、自分の歌として歌ってくれたのがとても嬉しかったです。母親たちはみんな葛藤しながら仕事を続けてきたのです。

熱を出した子どもを預けて仕事に行かねばならなかった時、台所で食器を洗いながら「ガンバレ、ガンバレ」と声を出して自分を励ましていた日を思い出します。子どもの巣立ちの歌として、中村さんが娘の真歩さんの結婚式で歌ってくださるそうで、これもとても嬉しいです。

発表会の日は、会場全体が、暖かい雰囲気になりましたよね。小須田さんの歌で「みんなで手をつないで通ったね」と歌っている姿に、何だかジーンとしてしまいました。

自分に向き合い、ウソでない、借り物でない、イイカッコでない言葉を紡ぎ出し、五音階で曲をつけていったという結果が、どの曲を聞いても思わず涙が出てしまったという、あの会場の雰囲気を作り出していたのですね。

「一人ひとりの人生の重みを感じた。ムダな人生なんてない。人に対しても、自分に対しても、いいかげんではいけないと思った」と、友人が感想を話してくれました。

自分の歌では、リフレインの「育ちあったあの日は人生のたからもの」というところが気に入っています。そして本当の気持ちを形に残すことができたことで、この歌はまさしく「宝もの」になりました。ほんとうにありがとうございました

小林 千賀子

「みんなで手をつないで歌ったね～嬉しい思い出」

みんなで一緒に詩を書いて、音を探して生まれた歌を、現代座の舞台で皆様に聴いていただけて、幸せな時間でした。

詩を書かなくても、歌をつくらなくても、生きてはいけるけれど、みんなで一緒にあれこれ言い合いながら同じ時間を過ごしたことは、どれだけ豊かなことだったでしょう！

これから、少々たいへんなことがあっても大丈夫な根っこを育ててもらったようです。

仲間の人生の一部に沿うことができたようで、生まれた歌もまた、みんな自分の歌のように思えて、たいせつなこどもです。大事に歌い続けていきたいです。

笠木さんの歌にずっと憧れていました。うたづくりを教わることができ本当に幸せでした。ありがとうございます。

岡田さんの親心には、どれだけ感謝したらいいでしょう！

どうして、その人の言いたいことを音で現せるのでしょうか！

お二人に、みんなに、心をこめてほんとうにありがとうございました！

稲川 恵子

寺子屋の六年間は、私たちスタッフにとって大きなものをもらえた場所だった。それでも、私たちの立ち位置は三人の講師と生徒を繋ぐ役割だったと思う。

今回の笠木講座修了コンサートは、ささやかではあったとしても、私たちを初めて当事者にしたのだと思う。

「等身大の表現」は高揚より安堵感をくれた気がする。

自分が立っているところを知ることは、簡単なようで難しい。

安達さんの言葉に「第一次創造者」というのがある。第一次産業にひっかけて、人間にとっての必須の仕事としての創造者であれということだと思う。

今回のコンサートでそのことが少し理解できたかなと思う。

これからも地に足を着けた、地を耕すような「創造」をささやかでもしていきたい。

みやけ しゅうぎ

1

歌は歌われて歌になる。歌はみんなの前で歌われて生きる。そのことを私は初めて実感した。16曲の歌の配列が良かった。それぞれの歌がくっきりと聞こえた。それがコンサートの進行に楽しい秩序と変化を与えたと思う

2

まず1『小海小学校』が良かった。これがコンサート全体の成功を約束したとっていいと思う。この歌は小須田さんに続けて、みんなで手をつないで歌った。コンサートの冒頭からそういう「童心」で結び合う表現をしたことは、良かった。会場の人々は微笑みと共感を持って受け止めたようだ。また、そんなところに「めだか大学」で学ぶみんなの姿を垣間見たと思った人がいたかも知れない。

3

うれしかった	手をつないで歌った	あなたとわたしと	手をつないで歌った
たのしかった	声あわせて歌った	みんなとわたしと	声あわせて歌った
うれしかった	手をつないで歌った	あなたと世界と	声あわせて歌った

即興的に

4

『小海小学校』の次は2『ふるさとで私の春が始まる』。素朴なメロディーと「民謡音階」のベースを伝える自然と喜び。ああ、そうなんだと頷いた人もいるだろう。

そして3『いろりの赤い火』。このあたりから、会場全体、感動のボルテージが上がってきたようだ。父母のを中心にしんみりと歌われた山里の生活は、『いろりの赤い火』のリフレインによって、そのメロディーによって、追憶の余情が深まった。

5

4『うれしかった』は、祭りに誘われる少女の姿がくっきりと歌い取られた。聴く方も京都弁と小太鼓の軽快なリズムに浮き浮きしたようだ。起承転結の末に「お母ちゃんにほめられた」となってメデタシ。会場は、少女の浴衣姿に自分を重ねて聴いた人もいたはず。

「ひとりで着たんか 大きいなったな」という言葉に、母として、また遠い日の娘としての喜びを想起した人もいたことだろう。

6

7月3日、メールを見たら「作詞は心にしみる内容」という感想が寄せられていた。

家族のこと、今は亡き両親のこと、友達のこと、身の回りのこと等が歌われていたとあり、「涙が出そうな曲ばかり」とあった。同様の感想が幾つも送られてきた。歌詞が良いこともあるが、メロディがとて

も良く、作り手の心情がそのまま表れていた。そうしたことが重なって、聴く人に深い感動を与えたのだと思う。

7

15『思い出す手』は深く歌い出された。海よりも深いところから？

「わたし」に触れる母の手、父の手に凝縮された親の愛。贅肉を削いだ歌詞が端的に思いを伝え、聴く人に感動を与えた。

5『母さん ごめんなさい そして ありがとう』は淡々と歌われた。

それによって自責と悔恨の思いが滲み出ていた。このような母親への不孝は、都会に出た息子に避けがたい運命だ。身につまされた男性も多かったのではないか。私もそうだった。歌の最後に「母さん ごめんなさい そして ありがとう」とあった。私たちもちょっぴり救われた感じだが、思いは残る。

6『母親のひとりごと』は、歌い方が若々しく正直な歌だった。自分の子育てを正面から見直した母親もいたかも。また、こういうことが歌詞に書かれ、正直に歌われたことに驚く母親もいたことだろう。

一方で、7『君にありがとう』がある。息子の折々の健気な言葉に、「一緒に生き、育ちあって来た」という母親の実感が重なる。育児に心して来た母ならではの歌で有ろう。ステージで、この歌は「人生の宝物」のように大事に歌われていた。

8

8『じいちゃんの唄』は父の生涯を歌ったもの。

4番までの歌詞、長いとは感じなかった。父を歌うと叙事的になり堅くなりがち。しかしこのように歌われると、言葉や構成から受けた危惧は払拭され、しみじみとした良い歌になった。

リフレインの部分には、日本古来の口説（くどき）と歌調がどこか似ている。しかし、ちっとも古くない。リフレインの効果も大きいようだ。

9

9『私の心の水の音』は、自分の内面を歌った。このコンサートでは数少ない歌である。歌が出来る経緯が会場の関心と呼んだようだ。しかし、歌うことで自分の心が清められることを歌っている。

この歌が新鮮なのは、歌う自分の心の姿を「コロコロコロ」とのみ表現していたこと。歌唱の力もあって、その音にいたる心情のやりとりが熔融されていた。

10

私は10『はなみずき』を歌った。声が出るようになって、気持ちに少し余裕が出た。

歌い方が単調にならないよう努めたが、思うように歌えなかった。

この歌は笠木講座の最中にわりとすんなり生まれた。「はなみずき」の語感を生かし、この花をめぐる叙情のストーリーを短く歌ったものだが、唯美的になっている。生活実感に乏しく、

「思想」的なものにも欠け、メロディもイマイチ。

歌う前の自己紹介だが、故郷を「捨てた」こと、故郷の大震災・大津波のこと・現在の心境などを話したが、この歌との関係は説明不能。言えることは、これから歌う自分の歌は違ったものになるだろうということだけ。

11

11『大根一本』は不思議な歌である。

身ぢか過ぎて歌になりそうもない大根一本。それも尻尾の先まで刻んで料理するさまを「主婦」感覚

で歌う。ステージで大勢で。その軽い意外さとユーモアが、納得づきでみんなに受けたようだ。

この歌が受けた理由はもう一つあったと思う。「わらべうた」調のメロディである。

「主婦」たちは勢いよく歌って、それなりにおもしろく良かったが、少女的な歌い方がどこかに残っていて、それがまた聴く人、特に女性のこころの奥で共鳴したようだ。

『大根一本』の歌の不思議さは、ステージで歌われて初めて気付いたことである。

1 2

1 2『そうは思っただけのもの』は、現職教員の歌。それゆえに切実感があつた。

男性が一人で歌い、二人で歌い、男性群がリフレインで歌った。このように、応援を「加勢」する歌唱スタイルは効果的だったと思う。また、それによって、一人の教員の「労働哀歌」は、職業男性共有のテーマとなり、現代社会にうったえるものとなった。また、それがこの場で顕在化した。これからは教員組合だけでなく、各種の職場でも歌ってほしい。

この歌のリフレインの歌い方は「合唱」とならず、個々に歌われた歌が重なったものになっていた。他の合唱団で歌っている人の中には、そのことに違和感を持った人もいただろうと思う。しかし、この歌の場合、普通の「合唱」の形を取らないのが良かった。個々を消去して「声をあわせ」るよりも、それぞれのナマの声の集合である方が、この歌に合っていると思うのだ。歌いながらそう思った。他の人もそうだったようで、はみ出ない程度に自分を出して歌っていた。

それについて感想を述べた人のなかに、驚きながらも肯定する人がいたようだ。その声聞こえたい。そこで余計なことを考えた。リフレインなどを合唱するときは、歌い方に「めだか大学」独特のハーモニーを編み出す。そういう試みなどしてみたら？

1 3

アンケートの回答を見ると、歌い方のうまい下手でなく、歌を作ること、それを歌うことに大きな関心があったようである。そして、みんなで歌うということにも。

私たちは意識するしないにかかわらず、ステージの表現行為の中で、歌とはなにか、歌うとはどういうことかと問うていたと思う。聴きにきた人たちはその問いに答えていた。そのことを忘れてはいけないと思う。

1 4

一転して1 3『海』。ステージから流れる美しい歌に、人々は息を呑んだ。胸にしみ入る悲しみ。こころの奥で揺れる思いに、涙した人もいたことだろう。この歌については多くを語るまい。語れば歌を汚してしまいそうだから。

歌い方としては混声合唱の他に、女声ソロ、女声合唱、男声合唱も考えられよう。

1 5

1 6『音を知らない君への子守唄』。むづかる孫を背にしてこの歌を歌ったら、その児はすやすやと寝入ったという。とても心にしみた。会場にも驚きと感動の波が静かに流れていた。その児には日の光や土のにおいと同じように、子守唄が伝わっていたのだ。

そのことは、子守唄とは何か？歌とは何か？音楽における音とは？感動とは？などなどを深いところで考えさせる。『音を知らない君への子守唄』は、このコンサートで問うてきたものの根本を、改めて問い直す歌となっていた。

14 『ハムケ』。李和連さんが歌い、みんなが共に歌った。手をつないで歌った。あなたと私を結び、互いに通い合うころこそ、みんなを感じる喜びだ。違いを超えて世界が求める共生の喜びだ。『小海小学校』の時の感動が、『ハムケ』でピークに。

この歌は、「めだか大学」の立ち位置と方向を示す意味でも常に歌われてよい歌だ。

17

大地はみどり	手をつないで歌おう	あなたとわたし	手をつないで歌おう
大空はあおい	声あわせて歌おう	みんなとわたし	声あわせて歌おう
地球は丸い	手をつないで歌おう	あなたと世界と	声あわせて歌おう

18

私たちのほとんどが、初めて詞を書き曲を作った。詞にコジツケや誇張がなく、曲にも無理がない。歌をつくり歌う人の本音そのまま出ていると思う。

それぞれの曲はポイントが抑えられている。岡田さんのお陰だが、それぞれがそれぞれに音の種を見つけ育て、歌の花を咲かせたのだ。

「日本語の法則が働く民謡音階」の歌は、こうしてステージ発表という結実を見た。歌は誰でも作れるという実感を、私たちは歌いながら確認したと思う。

しかし、そのような歌は、誰もが同じように作れるものではない。自分の歌は自分だけしか作れない。そういう意味で、私たちの歌は個性的なものであり、またそうでなければならぬものだと思う。そのこともまた、それぞれが実感したことだろう。

19

私は、ステージで歌ってから、自分のことをいい加減に見ないようにしようと思っている。

そして、感じたこと、感動したことをもっと大事にしようと思う。感じたこと、感動したことに素直に向き合い、内側からわき出る音を聴きだし、音が呼び覚ますものごとや思いを捉えたい。もちろん、音より言葉が先に生まれることもある。そういう時はそれにふさわしい音を拾い充てて、歌いたい。いや、音と言葉と一緒に生まれ、歌になることもあり得る。その時はその時だ。そして私は、自分の立ち位置を、周囲の人、社会や世界や歴史と関わる中で確かめながら、そのことを歌で発言して行きたい。

20

私たちがつくった歌はわかりやすく、親しみがある。覚えやすく歌いやすい。コンサートの会場に来た人たちは、多くがそのように感じたようだ。うれしいことだ。

ただ「もの足りない」と感じた人もいたようだ。「もの足りない」理由は何だろう。歌い方だろうか。歌詞だろうか。曲のことだろうか。「西洋の歌」と較べてのことだろうか。いずれにしても、そうしたことは私たちの勉強材料として取りあげてみたい。

ただ、それはそれとして、私たちは「めだか大学」で岡田学長から学んで来たことを、何度も何度も確かめて、自己評価しておきたい。

21

打ち上げの席で、安達元彦さんが「音楽言語が足りない」と言ったように思う。音楽言語って何だっけ？ この際だから、その音楽言語の視点に立って自分たちの歌を点検してみても良さそうだ。